

第二言語不安と自尊感情との関係¹⁾

—日本語学習者を対象として—

元田 静

要 旨

本研究は、第二言語不安と自尊感情との関係について実証的に検討したものである。日本語学習者 98 名を対象に調査した結果、(1) 日本語不安と自尊感情は負の相関関係にあること、(2) 「日本語での自尊感情」のほうが「全体的な自尊感情」よりも日本語不安との関係が強いこと、(3) 自尊感情および日本語不安は、「日本語レベルの自己評価」よりも「クラスでの位置づけ」との関係が強いことが示された。

【キーワード】日本語不安、全体的な自尊感情、日本語での自尊感情、クラスでの位置づけ、日本語レベルの自己評価

1. はじめに

第二言語不安とは、「第二言語の学習や使用、習得に特定的に関わる不安や心配、およびそれによって引き起こされる緊張や焦り」のことである(元田, 2000: 422)。第二言語不安は、1980年代以降、第二言語の学習や習得に大きな影響を与える情意要因の一つとして注目を集めてきた。現在では多くの先行研究によって、不安が第二言語の入力・処理・出力を妨害することや、学習行動および言語使用を抑制することなどが明らかにされている(Horwitz, Horwitz, & Cope, 1986; Steinberg & Horwitz, 1986; MacIntyre & Gardner, 1994)。したがって、今後はいかにして不安を軽減するかが教育上の課題であるといえる。

不安を軽減するためには、不安そのものだけではなく、不安と関わりのある他の要因についても広く考慮する必要がある。その要因の一つとして、自尊感情が考えられる。May (1950)によると、不安は個人が一つのパーソナリティとして存在する上で本質的なものと考え、ある「価値」が脅かされているときに生じるといふ。この「価値」とは、自己に対する価値感情、すなわち自尊感情である。

これまでの第二言語不安に関する研究においても、不安と自尊感情との関わりについて指摘がなされてきたが、両者の関係について実証的に調査したものはほとんどない。本研究は、このような現状を踏まえ、第二言語不安と自尊感情との関係について

実証的な検討を行い、第二言語不安の軽減に関する手がかりを得ようとするものである。

2. 理論的背景

2.1 自尊感情の概念

自尊感情には 2 つの解釈がある。Rosenberg (1965)によれば、一つは、自分を「とてもよい」と思うことであり、もう一つは、自分は「これでよい」と思うことである。本当の意味で自尊感情が高いのは後者であるという。つまり、他者との優劣に基づいて自分をよいと思うのではなく、どのような自分であっても単純に自分には価値があると感じ、自分を尊重しているのである。

さらに、自尊感情の程度は、個人がある対象をどれだけ重視しているかという重要度によって異なるという(榎本, 1998)。また、全体的な自尊感情、特定の自尊感情、課題での自尊感情というような階層性があることも指摘されている(Shavelson, Horner, & Stanton, 1976)。

2.2 第二言語教育・習得研究における自尊感情

第二言語教育・習得研究では、自己理論や自己の成長を重視するヒューマニスティック心理学の影響を受け、1970年代から自尊感情が注目されてきた(e.g., Stevick, 1973)。第二言語習得と自尊感情との関係について実証的に検討したものは少ないが、その一つに Heyde (1977)の研究がある。Heyde (1977)は、自尊感情は第二言語、とくに口頭能力

に影響を与える要因であると考え、心理学における Shavelson *et al.* (1976) の自尊感情の階層モデルを参考に、自尊感情を「全体的な自尊感情」と第二言語場面に特定化した「第二言語での自尊感情」に分けて検討した。調査の結果、(1) 2 つの自尊感情は正の相関関係にあること、(2) 「第二言語での自尊感情」のほうが「全体的な自尊感情」よりもスピーチの得点と関係が強いこと、(3) 自尊感情の高い学習者は自尊感情の低い学習者よりもスピーチの得点が高いことが示された。

3. 調査の目的と仮説

第二言語不安と自尊感情との関係については、これまでもその重要性が指摘されている (Young, 1990, 細田, 1994; Oxford, 1999)。それは、第二言語での学習・使用場面が、それまでに母語で形成されてきた学習者の自己概念に変化を与え、不安を喚起する要素を多分に有していると考えられるからである。たとえば、第二言語習得の初期段階では必然的に幼児レベルの言語で対応することを強いられ、他者からの訂正に甘んじなければならないため、自分が劣った立場にあると感じる可能性がある (Stevick, 1973; Tudor, 1996)。また、第二言語の学習場面では、他の学習者と比較して自分はなかなか上達しないと感じたり、劣っていると感じたりする可能性も考えられる (Price, 1991)。さらに、第二言語不安は自尊感情が脅かされたときに生じるという指摘 (Tudor, 1996; 細田, 1994) や、自尊感情の低い学習者は第二言語不安が高い傾向にあるという指摘 (Young, 1990) もある。

しかしながら、自尊感情と第二言語不安との関係について実証的に明らかにしたものはほとんどない。また、日本語学習者を対象として両者の関係を探った研究も見当たらない。そこで本研究では、日本語学習者の第二言語不安と自尊感情との関係を明らかにし、不安軽減の手がかりを得ることを目的とする。調査では、Heyde (1977) の調査と同様、自尊感情を「全体的な自尊感情」と「日本語での自尊感情」に分けて測定する。これまでの先行研究に基づき、以下の仮説を立てた。

<仮説 1> 「全体的な自尊感情」および「日本語での自尊感情」は、日本語不安と負の相関関係にある。

<仮説 2> 「日本語での自尊感情」のほうが「全体

的な自尊感情」よりも日本語不安との関係が強い。

また、本研究では、学習者の日本語能力に対する自己評価が自尊感情や不安とどのような関係にあるのかについても検討する。日本語能力の自己評価としては、「クラスでの位置づけ」(上・中・下) と「日本語レベルの自己評価」(初級・中級・上級) の2つを取りあげる。

さらに、学習者が日本語を重要視しているかどうかによって自尊感情が異なることも考えられるため、日本語の重要度についても調査項目に含めることにする。

なお、今回の調査対象者は日本で学ぶ日本語学習者である。このような目標言語使用環境下では、教室内だけではなく教室外における日本語使用についても考慮しなければならない (元田, 2000)。そこで、教室内と教室外の2つの観点を取り入れて調査を行う。

4. 方法

4.1 調査対象者

日本国内の4つの大学において日本語の授業(専門の授業や日本事情の授業を除く)を受講している日本語学習者 98 名を対象とした。詳細は以下の通りである。

①性別: 男性 40 名, 女性 58 名

②出身地: 東アジア 37 名 (中国 31 名, 韓国 6 名), 東南アジア 25 名, 南アメリカ 11 名, 欧米 10 名, 南アジア 5 名, その他 10 名

4.2 質問紙の構成と手続き

用いた尺度は以下の通りであった。

①日本語不安

元田 (2000) の日本語不安尺度 (JLAS) を用いた。この尺度は教室内不安 23 項目 (以下、「日本語不安 (内) 」) と教室外不安 22 項目 (以下、「日本語不安 (外) 」) によって構成されており、それぞれ3つの下位尺度²⁾ からなる。教室内不安の下位尺度は「内 1: 発話活動における緊張」「内 2: 理解の不確かさに対する不安」「内 3: 低い日本語能力に対する心配」である。教室外不安の下位尺度は「外 1: 日本人との意志疎通に対する不安」「外 2: 低い日本語能力に対する心配」「外 3: 特定場面における緊張」である。回答は「全くあてはまらない (1 点)」から「非常によくあてはまる (6 点)」までの

6 件法で求めた。

②全体的な自尊感情

これまで多くの研究に用いられてきた Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を日本語に翻訳して用いた。尺度は 10 項目からなり、全体的に自分をどのように感じているかが測定される。回答は Rosenberg (1965) と同様、「全くあてはまらない (1 点)」から「非常によくあてはまる (4 点)」までの 4 件法で求めた。

③日本語での自尊感情

Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の 10 項目を日本語場面に置き換え、教室内、教室外に分けて作成した(「日本語での自尊感情 (内)」 「日本語での自尊感情 (外)」。この尺度では、自分の日本語や、日本語を学習したり使用したりしているときの自分に対してどのように感じているかが測定される。回答形式は②と同様である。

④日本語の重要度

「あなたにとって日本語はどれくらい重要ですか」という質問に対し、「全く重要ではない (1 点)」から「非常に重要である (7 点)」までの 7 件法で求めた。

⑤クラスでの位置づけ

「日本語のクラスの中で、あなたの日本語のレベルはどれくらいだと思いますか」という質問に対し、「上の方」「真ん中くらい」「下の方」の中から 1 つ選択を求めた。得点は「上の方」から順に 3 点、2 点、1 点とした。

⑥日本語レベルの自己評価

「あなたの日本語レベルはどれくらいだと思いますか」という質問に対し、「初級」「中級」「上級」の中から 1 つ選択を求めた。得点は初級から順に 1 点、2 点、3 点とした。

⑦実際のクラスレベル

質問紙を配布する際に、所属している日本語クラスレベル(初級・中級・上級)を調査者が書き留めた。

質問紙の言語は、英語・中国語・韓国語の 3 種類であり、いずれも日本語(ルビ付き)を併記した。最後に、出身や滞日年数など学習者の背景を尋ねる質問紙を置いた。なお、日本語不安の教室内と教室外、および日本語での自尊感情の教室内と教室外の順番を入れ替えたものも同数用意した。

調査者が授業前あるいは授業後に直接質問紙を配

布し、郵送によって回収した。調査は、2000 年 1 月から 2 月の間に行われた。質問紙の回収率は 71.5%であった。

5. 結果

5.1 日本語の重要度

7 段階評定での回答に対し、真ん中の 4 に回答した者を除き、5 以上に回答した者 82 名、3 以下に回答した者 3 名であった。そのため、日本語を重視しているグループと重視していないグループに分けて検討することは人数的に困難であると考え、その後の分析では 1 つにまとめて検討することにした。

5.2 項目分析と信頼性

「全体的な自尊感情」「日本語での自尊感情 (内)」「日本語での自尊感情 (外)」(以下、「全自尊」「日自尊 (内)」「日自尊 (外)」と省略) の 3 尺度について、項目分析を行った。

まず、自尊感情は一つの構成概念として捉えたほうが内容的に適當であると考え、一次元構造を仮定し、それぞれ共通性の初期値を 1 とする主成分分析を行った。データの解析には、統計パッケージ SAS (release 6.12) を用いた。分析の結果、いずれの尺度においても項目 8 を除いたほかのすべての項目が第 1 主成分に対して高い負荷量を示した(表 1, 表 2, 表 3)。寄与率はそれぞれ 36.7%, 42.3%, 39.0%であった。次に、各尺度から 1 項目ずつ除いて全体の α 係数を算出したところ、やはり、項目 8 を除いたときの α 係数が最も高かった。そこで、3 つの自尊感情尺度から項目 8 を除外して、各尺度の合計得点を分析に用いることにした。項目 8 を除いたときの α 係数は、それぞれ .82, .85, .82 であった。

日本語不安尺度は、今回の調査ではいずれの α 係数も .82~.95 であったことから、内的整合性は十分であると判断し、各下位尺度のそれぞれの合計得点を分析に用いることにした。

5.3 自尊感情間の相関

「全自尊」と「日自尊 (内)」, および「全自尊」と「日自尊 (外)」間の相関をピアソンの積率相関係数で求めたところ、それぞれ $r=.55$ ($p<.001$), $r=.47$ ($p<.001$) であった。また、「日自尊 (内)」と「日自尊 (外)」との相関は $r=.84$ ($p<.001$) であった。

表1 「全体的な自尊感情」の主成分分析結果

項目内容	負荷量	共通性
7. だいたい、自分に満足しています。	.72	.52
6. 私は、自分自身を前向きにとらえています。	.69	.48
4. 私は、他の人と同じくらい物事がうまくできます。	.67	.45
9. ときどき、自分は本当に役に立たないと思います。(R)	.66	.44
5. 私には、あまり誇れるところがないと思います。(R)	.61	.38
3. 全体的に、自分はだめだなと思う傾向があります。(R)	.60	.36
2. 私には、いいところがたくさんあると思います。	.60	.36
1. 私には、少なくとも他の人と同じくらい価値があると思います。	.57	.32
10. ときどき、自分は全くだめだと思います。(R)	.51	.26
8. もっと自分を尊重できたらいいのに、と思います。(R)	.33	.11

注1) 左側の数字は質問紙における項目番号を示す(表2, 表3も同様)。

注2) Rは反転項目であることを示す(表2, 表3も同様)。

表2 「日本語での自尊感情(内)」の主成分分析結果

項目内容	負荷量	共通性
2. 自分の日本語には、いい面がたくさんあると思います。	.78	.61
3. 日本語の教室で、自分はだめだなと思う傾向があります。(R)	.77	.59
4. 私は、他の学生と同じくらい日本語がうまくできます。	.75	.56
5. 自分の日本語には、あまり得意なところがないと思います。(R)	.71	.51
10. ときどき、自分の日本語は全くだめだと思います (R)	.69	.48
1. 日本語の教室で、私には他の学生と同じくらい価値があると思っています。	.65	.42
6. 私は、自分の日本語を前向きにとらえています。	.63	.40
7. だいたい、自分の日本語に満足しています。	.63	.39
9. ときどき、自分の日本語は本当に役に立たないと思います。(R)	.45	.21
8. 日本語の教室で、もっと自分に自信を持てたらいいのに、と思います。(R)	.25	.06

表3 「日本語での自尊感情(外)」の主成分分析結果

項目内容	負荷量	共通性
10. ときどき、自分の日本語は全くだめだと思います。(R)	.79	.63
5. 自分の日本語には、あまり得意なところがないと思います。(R)	.76	.58
4. 私は、他の留学生と同じくらい日本語がうまくできます。	.72	.51
自分の日本語には、いい面がたくさんあると思います。	.71	.50
1. 日本人と日本語で話すとき、私には彼らと同じくらい価値があると思っています。	.61	.37
6. 私は、自分の日本語を前向きにとらえています。	.59	.35
9. ときどき、自分の日本語は本当に役に立たないと思います。(R)	.55	.30
7. だいたい、自分の日本語に満足しています。	.54	.30
3. 日本人と話すとき、自分はだめだなと思う傾向があります。(R)	.53	.29
8. 日本人と話すとき、もっと自分に自信を持てたらいいのに、と思います。(R)	.27	.07

5.4 日本語不安と自尊感情との相関

「日本語不安(内)(外)」と「全自尊」「日自尊(内)(外)」間の相関をピアソンの積率相関係数によって求めた(表4)。主な特徴は以下の通りであった。

- ①「日本語不安(内)(外)」は、「全自尊」「日自尊(内)(外)」と有意な負の相関関係にあった。
- ②「日本語不安(内)(外)」は、「全自尊」よりも「日自尊(内)(外)」との相関が高かった。
- ③「日本語不安(内)」は「日自尊(外)」よりも「日自尊(内)」との相関が高く、「日本語不安(外)」は「日自尊(内)」よりも「日自尊

(外)」との相関が高かった。

5.5 「クラスでの位置づけ」「日本語レベルの自己評価」と自尊感情、日本語不安間の相関

次に、「クラスでの位置づけ」「日本語レベルの自己評価」と、「全自尊」「日自尊(内)(外)」「日本語不安(内)(外)」間の相関をスピアマンの順位相関係数によって求めた(表5)。

「クラスでの位置づけ」と最も相関が高かったのは「日自尊(内)」であり、次いで「日自尊(外)」、「日本語不安(内)」であった。「全自尊」と「日本語不安(外)」は先の3つの変数と比べて相関が低かった。日本語不安の6つの下位

尺度では、教室内の3つの下位尺度、および教室外の2つの尺度と有意な相関が見られた。なお、自尊感情は正、日本語不安は負の相関であった。

「日本語レベルの自己評価」は、「日自尊(内)(外)」との間に有意な正の相関を示した。しかし、「日本語不安(内)(外)」および「全自尊」との間には有意な相関は見られなかった。また、日本語不安の6つの下位尺度においても有意な相関は見られなかった。

さらに、補足的な分析として、これらの2つの

自己評価と実際のクラスレベル(初級・中級・上級)との関係をスピアマンの順位相関係数によって検討した。その結果、「日本語レベル」と実際のクラスレベルでは $\rho = .62$ ($p < .001$)と有意な相関が示されたが、「クラスでの位置づけ」と実際のクラスレベルでは有意な相関は示されなかった。なお、「クラスでの位置づけ」と「日本語レベル」との間の相関係数は $\rho = .42$ ($p < .001$)で有意であった。

表4 「日本語不安(内)(外)」と「全体的な自尊感情」「日本語での自尊感情(内)(外)」間の相関

	日不安内	内1	内2	内3	日不安外	外1	外2	外3
全自尊	-.22*	-.19	-.21*	-.27**	-.29**	-.26*	-.39***	-.11
日自尊内	-.56***	-.46***	-.51***	-.55***	-.45***	-.38***	-.49***	-.30**
日自尊外	-.48***	-.40***	-.44***	-.44***	-.52***	-.44***	-.58***	-.36***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表5 「クラスでの位置づけ」「日本語レベルの自己評価」と「全体的な自尊感情」「日本語での自尊感情(内)(外)」「日本語不安(内)(外)」間の相関

	全自尊	日自尊内	日自尊外
位置づけ	.23*	.61***	.49***
レベル	.03	.33**	.27**

	日不安内	内1	内2	内3	日不安外	外1	外2	外3
位置づけ	-.45***	-.46***	-.39***	-.38***	-.23*	-.13	-.22*	-.23*
レベル	-.11	-.07	-.14	-.07	-.09	-.08	-.08	-.00

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

6. 考察

調査結果を以下の4つに分けて考察する。

第1に、日本語の重要度について述べる。今回の調査では、多くの被調査者が日本語を重要視していた。これは、目標言語使用環境で生活するには日本語が必須であるためという解釈と、今回の調査では日本語の教室で日本語を学習している留学生を対象としたためという解釈が考えられる。

第2に、自尊感情間の関係について述べる。「全体的な自尊感情」と「日本語での自尊感情」との間に正の相関が見られたのはどちらも自尊感情を測定しているためだと考えられる。しかし、両尺度とも同じ Rosenberg (1965) の尺度を基に構成されている割に相関は高くない。このことから、両者は重なる部分も多いが全く同一の概念ではないといえる。また、「日本語での自尊感情(内)」と「日本語での自尊感情(外)」との相関が非常に高かったのは、環境は別であっても両者

とも日本語場面に特定化した自尊感情を測定しているためだと考えられる。

第3に、日本語不安と自尊感情との関係について述べる。日本語不安はすべての自尊感情尺度と負の相関を示し、<仮説1>が支持された。このことは、第二言語不安の高い人は自尊感情が低い傾向にあること、あるいは自尊感情の低い人は第二言語不安が高い傾向にあることを示している。先行研究でも指摘されていた第二言語不安と自尊感情との負の関係が数値の上でも証明されたといえよう。

日本語不安は「全体的な自尊感情」よりも「日本語での自尊感情」との相関が高く、<仮説2>が支持された。このことから、第二言語学習・使用における不安軽減を考えるためには、第二言語場面に特定化した自尊感情に着目する必要があるといえる。

さらに、教室不安は教室内の自尊感情と、教

室外不安は教室外の自尊感情と結びつきが強いことが示唆された。したがって、不安を効果的に軽減するためには、教室内では教室内の、教室外では教室外の自尊感情に注目するべきだといえる。

第4に、「クラスでの位置づけ」「日本語レベルの自己評価」と自尊感情、日本語不安間の関係について述べる。「クラスでの位置づけ」は、自尊感情とは正の関係、日本語不安（教室外不安の一部の下位尺度を除く）とは負の関係にあった。これは、自尊感情が低く、不安の高い人ほどクラスでの位置づけが低いこと、あるいはクラスでの位置づけが低い人ほど自尊感情が低く、不安が高いことを示している。

対して「日本語レベルの自己評価」は、日本語での自尊感情とのみ有意な相関を示し、全体的な自尊感情や日本語不安とはほとんど関係がなかった。これについては、たとえば、第二言語での自尊感情の低い学習者は自分を初級であると見なすことが多くても、それが必ずしも不安の高さに結びついているわけではないという解釈ができる。

以上のように、「クラスでの位置づけ」と「日本語レベルの自己評価」は、ともに日本語場面に特定化した自尊感情、とくに教室内の自尊感情と関わりがあることが示された。それぞれの相関係数を比較すると、明らかに「クラスでの位置づけ」のほうが「日本語レベルの自己評価」よりも日本語での自尊感情との関わりが強いことがわかる。また、日本語不安と関わりがあったのも「クラスでの位置づけ」であった。一つの解釈として、実際のクラスレベルが「日本語レベルの自己評価」と有意な相関を示さなかったことから、「日本語レベルの自己評価」は実際の能力に基づいた比較的客観的な自己評価であり、「クラスでの位置づけ」は実際の能力というより身近なクラスメートとの比較に基づいた比較的主観的な自己評価であると捉えることができる。その解釈に基づくと、今回の結果は、身近なクラスメートとの比較に基づいた自己評価が、自尊感情や不安を考える上で重要な鍵となる可能性を示している。

これに類似した結果は、社会心理学における調査でも得られている。Rogers (1978) の調査では、クラス内の順位を基に成績上位群・中位群・下位群に分類した場合、成績は自己概念と関係が

あったのに対し、クラス内に基準を置かず成績上位群・中位群・下位群に分類した場合には、成績は自己概念とほとんど関係がなかった。この結果からも、本研究と同様、実際の能力水準よりも身近な他者との比較のほうが自己概念や自尊感情の形成に影響を与える可能性が示されている。

ここで Rosenberg (1965) の自尊感情の概念規定に戻ると、自尊感情が高いということは、他者との優劣の比較に依存するのではなく、どのような自分であっても自分の価値を認め、自分を尊重することであった。したがって、自尊感情を高め不安を軽減させるためには、クラス内における他者との比較を緩和し、クラスメートに対する認知を改善することが一つの方策として考えられる。すなわち、お互いを優劣の基準や競争相手として見るのではなく、共に学ぶ仲間であると捉えるのである。そのためには、まずクラス全体の信頼関係を強め、教室の雰囲気相互的・支持的な暖かいものにしていく必要がある。そのような教室風土においてこそ、一人ひとりが自分自身の価値を恐れなく認めることができるのだと考える。

7. 今後の課題

最後に、今後の課題について2点述べる。

まず、本研究では、第二言語不安と自尊感情との関係を相関によって検討したため、因果関係については明らかにしていない。今後、「クラスでの位置づけ」など他者に関わる要因も取り入れ、第二言語不安と自尊感情との因果関係について検討していく必要があるだろう。

また、今回の結果は98名の日本における日本語学習者に限定して得られたものに過ぎない。解釈の妥当性を確認するためにも、他言語や他環境の学習者を対象とした広範な調査を行い、緻密に検討を重ねていく必要があると思われる。

注

- 1) 本研究は、広島大学教育学研究科に提出した博士論文『目標言語使用環境における第二言語不安の研究—日本語学習者を対象として—』(未公開)の一部に加筆・修正を行ったものである。また、本研究は、平成11年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成を受けた。
- 2) 元田(2000)の尺度名を若干変更しているが、内容に変更はない。

引用文献

- 榎本博明 (1998) 『「自己」の心理学—自分探しへの誘い—』サイエンス社
- 細田和雅 (1994) 「学習者の実態と要因」『新・英語教育科の研究 (改訂版)』大修館書店, Pp. 302-323.
- 元田静 (2000) 「日本語不安尺度の作成とその検討—目標言語使用環境における第二言語不安の測定—」『教育心理学研究』, **48**, 422-432.
- Heyde, A.W. 1977 The relationship between self esteem and the oral production of a second language. In H.D. Brown, C. Yorio, & R. Crymes (Eds.), *On TESOL '77*. Washington, D.C.: Teaching English to Speakers of Other Languages. Pp. 226-240.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. 1986 Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, **70**, 125-132.
- MacIntyre, P.D., & Gardner, R.C. 1994 The effects of induced anxiety on three stages of cognitive processing in computerrized vocabulary learning. *Studies in Second Language Acquisition*, **16**, 1-17.
- May, R. 1950 *The meaning of anxiety*. New York: The Ronald Press. [小野泰博 (訳) (1963) 『不安の人間学』誠信書房]
- Oxford, R.L. 1999 Anxiety and the language learner: New insights. In J. Arnold (Ed.), *Affect in language learning*. Cambridge University Press. Pp. 58-67.
- Price, M.L. 1991 The subjective experience of foreign language anxiety: Interviews with highly anxious students. In E.K. Horwitz & D.J. Young (Eds.), *Language anxiety: From theory and research to classroom implications*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall. Pp. 101-108.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Rogers, C.M. 1978 Social comparison in the classroom: The relationship between academic achievement and self-concept. *Journal of Educational Psychology*, **70**, 50-57.
- Shavelson, R.J., Hubner, J.J., & Stanton, G.C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, **46**, 407-441.
- Steinberg, F.S., & Horwitz, E.K. 1986 The effect of induced anxiety on the denotative and interpretive content of second language speech. *TESOL Quarterly*, **20**, 131-136.
- Stevick, E.W. 1973 Review article. Counseling-learning: A whole person model for education. *Language Learning*, **23**, 259-271.
- Tudor, I. 1996 *Learner centeredness as language education*. Cambridge University Press.
- Young, D.J. 1990 An investigation students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, **23**, 539-553.

もとだ しずか／東海大学留学生教育センター
motoda@keyaki.cc-u.tokai

The relationship between second language anxiety and self-esteem among the Japanese language learners

MOTODA Shizuka

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between the anxiety of learning a second language and self-esteem. 98 students who were studying Japanese as a second language in Japan participated in this investigation. The results revealed three main conclusions as follows; (1) There was a negative correlation between language anxiety and self-esteem, (2) Specific self-esteem was more closely related to language anxiety than global self-esteem, and (3) Both specific self-esteem and language anxiety were more closely related to the self-evaluation based on the comparison with classmates than that based on their general Japanese level.

【Keywords】 Japanese language anxiety, global self-esteem, specific self-esteem, two self-evaluations

(International Student Education Center of Tokai University)